

明治・大正期の『読売新聞』の文体

—雑誌との比較から—

近藤 明日子

1 はじめに

明治期に入り、新たなメディアとして新聞と雑誌が登場する。これらは多くの人に受容され影響を与えたことから、近代の日本語の書き言葉を研究する上で参照すべき重要な資料と言える。雑誌についてはコーパス化という形で先んじて研究用資料としての整備が進み、国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』（短単位データ 1.2）（以下、「明治・大正編Ⅰ雑誌」と呼ぶ）が公開され、近代日本語の研究で活用されるようになってきている。一方の新聞のコーパス化は雑誌に遅れたものの、近年ようやく雑誌と同じく『日本語歴史コーパス』のサブコーパスの一つ、国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅴ新聞』（短単位データ 0.7）（以下、「明治・大正編Ⅴ新聞」と呼ぶ）として公開され、今後の研究での活用が期待される。

これらのコーパスを使って研究目的の言語項目の用例を収集・分析するにあたり、あらかじめコーパスの言語資料としての特性を把握しておくことは、考察を深めるためにも必要である。「明治・大正編Ⅰ雑誌」については、近藤（2019a）（2019b）（2021）などで特に文体の面から資料特性の分析が進められている。本稿は、「明治・大正編Ⅴ新聞」でも同様に文体の面から資料特性を分析することを目的とする。そして、本コーパスの研究利用に備えたい。

2 『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅴ新聞』の基本言語量

「明治・大正編Ⅴ新聞」は1874（明治7）年創刊の『読売新聞』のコーパスである。収録対象年次は「明治・大正編Ⅰ雑誌」との対照研究が可能となるように、明治・大正期の1875・1881・1887・1895・1901・1909・1917・1925年の8か年となっている。各年では原則5月2日と11月2日の2号分の全文が収録されている。

ただし、1号あたりの語数の少ない年は語数が充足するまで続きの号も収録されている。収録サンプルの単位は記事である（高橋 2022）。

表1に「明治・大正編V新聞」の年別のサンプル数・延べ語数を示す¹。延べ語数は、記号・未知語類を除いた語数である（以下同様）。また、サンプル数・延べ語数はサンプルのジャンル（非文芸／文芸）別にも示す。

表1 「明治・大正編V新聞」のサンプル数・延べ語数

年	非文芸		文芸		計	
	サンプル数	延べ語数	サンプル数	延べ語数	サンプル数	延べ語数
1875	314	42,424	0	0	314	42,424
1881	291	48,911	0	0	291	48,911
1887	236	36,763	7	6,687	243	43,450
1895	198	41,064	5	5,813	203	46,877
1901	199	48,708	6	3,008	205	51,716
1909	109	37,066	14	6,115	123	43,181
1917	150	46,549	11	6,136	161	52,685
1925	182	50,576	12	5,522	194	56,098
計	1,679	352,061	55	33,281	1,734	385,342

表1で延べ語数を見ると、各年4.2～5.6万語、8か年全体で38.5万語が収録されている。非文芸ジャンルと文芸ジャンルを比較すると、非文芸ジャンルの語数のほうが多い。1875・1881年は非文芸ジャンルのみで文芸ジャンルはなく、1887年以降も各年非文芸ジャンルの語数が各年合計の85～94%と多くの割合を占めている。文芸ジャンルのサンプルの内容を確認すると小説・講談速記・詩歌等となっている。新聞の文体について考察する場合、注目すべきは非文芸ジャンルのサンプルのほうと考え、以下、非文芸ジャンルのサンプルを分析対象とする。

3 非文芸ジャンルの文体割合

次に、非文芸ジャンルのサンプルにおける文体別の言語量を見ていく。明治・大正期は書き言葉が文語体から口語体に大きく変化した時期であり、新聞の文体でもその変遷を分析する必要がある。

¹ 本稿で集計に使用した「明治・大正編V新聞」のデータは、コーパス検索アプリケーション「中納言」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)で一般に公開されている「明治・大正編V新聞」のものになった、国立国語研究所のデータベースに収録されているデータである。なお、サンプルの成立年情報が「1882年」となっているものは「1881年」の誤りと見なして訂正して集計した。

表2に「明治・大正編V新聞」の非文芸サンプルから会話・引用を除いた地の文について、文体（文語体／口語体／混在体）²ごとのサンプル数³と延べ語数を示す。また表2の数値から、延べ語数の文体割合を図示したものが図1である。そして比較のため、「明治・大正編I雑誌」の非文芸サンプル地の文の延べ語数の文体割合を図2として示す（近藤2021: p.83: 図3-2をもとに作成）。

表2 「明治・大正編V新聞」非文芸サンプル数と地の文の延べ語数

年	文語体		口語体		混在体		計	
	サンプル数	延べ語数	サンプル数	延べ語数	サンプル数	延べ語数	サンプル数	延べ語数
1875	38	5,711	265	34,105	0	0	303	39,816
1881	98	17,088	190	27,603	3	286	291	44,977
1887	231	34,047	4	541	1	826	236	35,414
1895	196	38,543	2	1,519	0	0	198	40,062
1901	190	42,879	9	3,844	0	0	199	46,723
1909	95	29,924	14	5,631	0	0	109	35,555
1917	108	24,688	42	16,256	0	0	150	40,944
1925	0	0	181	47,448	1	207	182	47,655
計	956	192,880	707	136,947	5	1,319	1,668	331,146

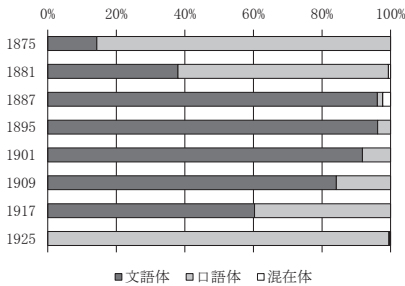


図1 「明治・大正編V新聞」非文芸サンプル地の文の延べ語数文体割合

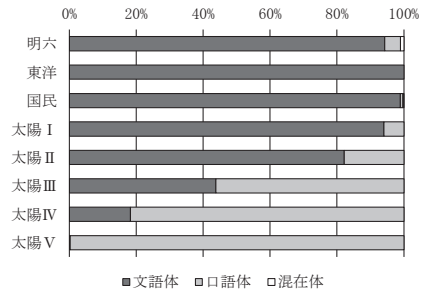


図2 「明治・大正編I雑誌」非文芸サンプル地の文の延べ語数文体割合

図1から明らかなように、「明治・大正編V新聞」において1875・1881年は口語体の割合が86%・61%と非常に高いのに対し、1887年になると逆に文語体が96%とほとんどを占め、全く異なる様相を見せる。

² コーパスの文体情報が「漢文」となっているものは除外して集計した。また、「不口語」「漢字」「不明」となっているものは、本稿筆者の判断でそれぞれ以下のように訂正して集計した。「不口語」は「口語」に訂正、「漢字」は「文語」に訂正、「不明」は「文語／口語／混在」のいずれかに訂正した。

³ 表2の合計サンプル数1668と表1の非文芸サンプル数1679が一致しないのは、非文芸サンプルで地の文のないものがコーパス全体で11サンプル存在し、それが表2ではカウントされていないためである。

『読売新聞』は創刊当初、識字リテラシーの低い非知識層を読者層とする小新聞であり、その時期に相当する1875・1881年には次にあげる(1)のような社会の事件・雑事を報じる記事が主に掲載されている。その文体は読者層に合わせ、敬体を用いた話し言葉の性質の強い口語体となっている。

- (1) ○浅草駒かた町百助よこ町の藍蠟屋の荒井金太郎といふものは借金の一件を訴へられて御差紙が来たれども三四度も出ずに居たゆゑ巡査に引かれて行ましたのを近所のものは見ても居られぬとて商賣を休んで心配して居るといふが皆さんも御差紙などが来たたら刻限を違へずに御出なさいよ

(60P 読売 1875_52003) 4

一方、1875年に文語体で書かれた記事の多くは、(2)のような候文体の官令をそのまま掲載するものである。

- (2) ○甲第二十一號

出版願届書の氏名従前族籍のみ肩書致し候處自今官位ある者は族籍並官位をも記入し可差出此旨布達候事

明治八年十月二十九日

内務卿大久保利通

(60P 読売 1875_B2003)

続く1881年になると、文語体は官令を掲載する記事だけでなく、(3)のような論説記事や(4)のような報道記事でも見られるようになる。

- (3) 天理は至公至正なるもの也人爲は然らず人の爲すまにまになれば善も有り不善も有り決して一定す可からず然るに人爲を以て天理同様に看做は心得違ひの甚だしきものと謂ふ可し

(60P 読売 1881_53005)

- (4) 皇太后宮には昨日午前九時の御出門にて上野の博覧會へ行啓になり各館を御巡覽のうへ美術館樓上にて御晝食を遊ばされ午後六時遷啓在せられたり

(60P 読売 1881_54006)

これが1887年に入ると口語体の記事は少数となり文語体の記事が中心となる。記事内容もこれまでで主流であった官令・国内雑報だけでなく経済・海外等に関する専門

4 用例引用の際は末尾の()内にサンプルIDを示す。

的な報道や論説も増加し、幅広くなる。明治10年代後半になると、大新聞の衰退とともに小新聞の読者層が大新聞の読者層であった知識人の一部にも広がり、また商人を中心とする庶民読者も増加し、小新聞の発展と地位の向上が見られた（山本1981、pp.76-91）。1887年以降の『読売新聞』の記事内容および文体の変化の一因として、読者層の変化を考える必要があるとそうである。この点については、他の新聞や媒体の文体の変化も交えて今後再考したい。

続く1895年以降は、文語体の割合が徐々に減少し、口語体の割合が増加する通時的変化が見られる。この傾向は図2にあるように「明治・大正編Ⅰ雑誌」でも同様に見られるが、口語体の増加の進む程度は「明治・大正編Ⅰ雑誌」に比べ「明治・大正編Ⅴ新聞」のほうが遅い。「明治・大正編Ⅰ雑誌」の1909年刊行の「太陽Ⅲ」では口語体は56%と過半を占めるのに対し、「明治・大正編Ⅴ新聞」の1909年ではまだ16%と少なく、1917年になっても口語体は40%と過半に達しない。この要因の一つとして、「明治・大正編Ⅰ雑誌」と比較して「明治・大正編Ⅴ新聞」は報道記事が多いことが考えられる。「明治・大正編Ⅰ雑誌」では、口語体が主流となっていくなかで文語体の記事内容が報道に偏っていくという現象が見られた（近藤2019a）。つまり、文語体は報道記事で需要が続くことで命脈を保っていたと言える。「明治・大正編Ⅴ新聞」はそのメディアの性質上、報道記事が多く、その結果、文語体が後年まで多く使用されたものと考えられる。以下の(5)~(7)に文語体の報道記事の例をあげる。

- (5) 小石川區關口臺町九番地土族北條三郎司は今度公爵徳川家達氏を相手取り地所取戻しの訴訟を東京地方裁判所へ提起したり (60P 読売 1901_52060)
- (6) 昨年中本邦より加奈太に輸入したる貨物の價額は二百萬九千七百四十七弗加奈太より本邦に輸出したる價額は僅に十三萬五千二百六十五弗にして之を前年度に比すれば輸入に於ては二十四萬七千餘弗輸出に於ては殆んど二萬三千弗を減ぜり (60P 読売 1901_53038)
- (7) 四月廿八日の戦闘には第一第三の兩軍參加したるが攻撃の主要目的地はオツピーの分離線にして即ちヒンデンブルグ將軍が急速に設備したる北方延線たるドロクールとクキアンとの中間線なり (60P 読売 1917_52001)

一方、1887年以降の口語体の記事に目を向けると、1887年は(8)のようなそれ以前の口語体記事の系譜を引き継いだ、敬体の口語体による雑報記事が中心となっている。

- (8) 近頃二三ヶ所へ忍び入り金銭衣類を盗み出し金は遊興に遣ひ衣類は品觸から足が附くを恐れて何處へも賣らずに着料となしまだ懷中にも小紙幣にて七十圓餘を所持して居たとの事にて一昨日檢事分局へ送られました
(60P 読売 1887_54021)

これが 1901 年になると、(9)のような随筆的な記事で口語体が使用されるようになり、常体も一般的になる。「明治・大正編 I 雑誌」では常体の口語体が雑文で先行して使用されており（田中 2004）、「明治・大正編 V 新聞」で随筆的な記事で使用が先行するのと同様の傾向である。

- (9) 僕は本屋であるが今年程學校の教科書の改定されたことは前代未聞である、中學程度と來ては一層甚しかった、
(60P 読売 1901_52006)

1917 年になると、(10)のような専門的な内容の論説記事でも常体の口語体が一部使用されるようになる。また、女性読者向けの婦人欄が登場し、そこでは(11)のような敬体の口語体で書かれた記事が主流である。女性向けの文章で敬体が多用されるのは「明治・大正編 I 雑誌」と同様の傾向である（近藤 2021: pp.86-96）。

- (10) 今回の定款改正が事業發展を目的とせることは右の通りであるが特に上海に工場を設置すること支那に於て日支合辦の同一事業を經營するを得ることとしたのは斯業會社としては最も必要な事である
(60P 読売 1917_52076)
- (11) 衣替への時期に近づいて來たので古着物が大分動くやうになりました毎年花見時になると例のやうによく賣れるのですが、近來は質流れの品物が無いのと新物が高いので景氣は餘りよくありません。
(60P 読売 1917_52042)

そして 1925 年になり、すべての記事が口語体で書かれるようになる。多くは(12)や(13)のような常体の口語体であるが、婦人欄では 1917 年同様、(14)のような敬体の口語体が主である。

- (12) 軍制改革に依る陸軍の大異動は既報の如く昨日發表されたが内主なるものは左の如くである
(60P 読売 1925_52016)
- (13) めでたき銀婚式當日畏くも兩陛下から其の篤行を表彰される名譽の孝子は東

- 京きやう全ぜん市しを通つうじてタツタ二人にりである (60P 読売 1925_52020)
- (14) この頃ころ小鳥こどりを愛あいする趣味しゆみがなかなか盛さかんになつてよく方々ほうほうの縁先えんさきなどからうる
はしい鳴なき聲こゑのもれるのを聞きくが、いかにものどかなものです、
(60P 読売 1925_52076)

このように、「明治・大正編V新聞」における1887年以降の文体の変遷は、読者層および記事内容の変化に対応しつつ、文語体から口語体へという大きな文体変化にそった動向を示している。そして、その文体と記事内容・読者層との対応は「明治・大正編I雑誌」と同様な傾向であることも分かった。

4 非文芸サンプルの語種率・品詞率

4.1 文語体の語種率・品詞率

次に、「明治・大正編V新聞」の非文芸サンプルについて語種率・品詞率の分析を行い、さらに文体について考察を進めていく。

最初に文語体の語種率を見ていく。図3は「明治・大正編V新聞」における文語体非文芸サンプルの地の文の、サンプル単位の漢語・和語・外来語・混種語の比率の分布を刊行年ごとに箱ひげ図で示したものである。なお、語種率の分析では、上記4種以外の語種および助詞・助動詞は対象外とする（以下同様）。

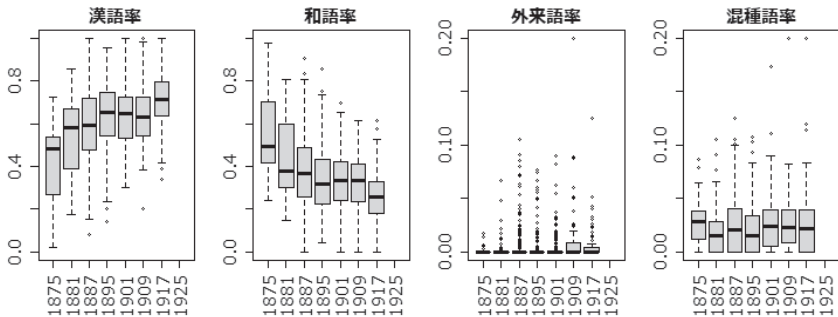


図3 「明治・大正編V新聞」の文語体非文芸サンプルの地の文の語種率の分布

図3から分かるように、「明治・大正編V新聞」では外来語率と混種語率は一貫して低く、漢語と和語で延べ語数のほとんどが占められている。つまり、漢語率と和語

率は負の相関の関係にあり、漢語率に注目すればそのサンプルの文体の傾向が分かることになる。図3で漢語率を見ると、1875年から1895年までは経年で増加し、次の1895年から1909年までは大きな変化が見られず一定し、1917年になると更に増加するという変化が見られる（1925年は該当サンプルがないのでグラフはない）。

次の図4は、比較のために「明治・大正編Ⅰ雑誌」の文語体非文芸サンプルの地の文の語種率の分布を示したものである（近藤2019a: 図1より作成）。

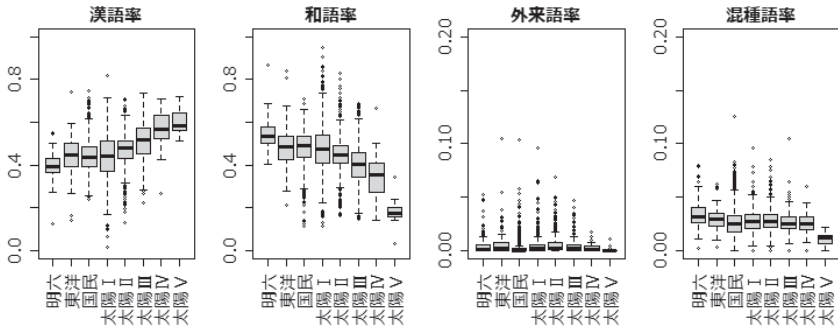


図4 「明治・大正編Ⅰ雑誌」の文語体非文芸サンプルの地の文の語種率の分布

図4から「明治・大正編Ⅰ雑誌」の漢語率の変化を見ると、1875～1895年に相当する「明六」～「太陽Ⅰ」では目立った増減は見られないのに対し、1895～1925年に相当する「太陽Ⅰ」～「太陽Ⅴ」では経年で増加するという、「明治・大正編Ⅴ新聞」とは異なる変化が見られる。また、「明治・大正編Ⅰ雑誌」よりも「明治・大正編Ⅴ新聞」のほうが全般に漢語率が高いことも分かる。

次に文語体の品詞率を見ていく。「明治・大正編Ⅴ新聞」における文語体非文芸サンプルの地の文の、サンプル単位の品詞率の分布を刊行年ごとに箱ひげ図で示したものが図5である。そして比較のため「明治・大正編Ⅰ雑誌」の文語体非文芸サンプルの地の文の主な品詞率の分布を図6として示す（近藤2019a: 図2より作成）。

図3で1875年から1895年にかけて漢語率が増加する変化が見られたが、図5においてその変化と一部対応するのは、1875年から1887年にかけての動詞率の減少と助詞率・助動詞率増加である。これは、1875年の文語体サンプルは(2)のような候文体で書かれた官令がほとんどを占めていたものが、以降その割合を減らし(3)(4)のような候文体ではない文語体の記事が増えていくことと呼応していると考えられる。和

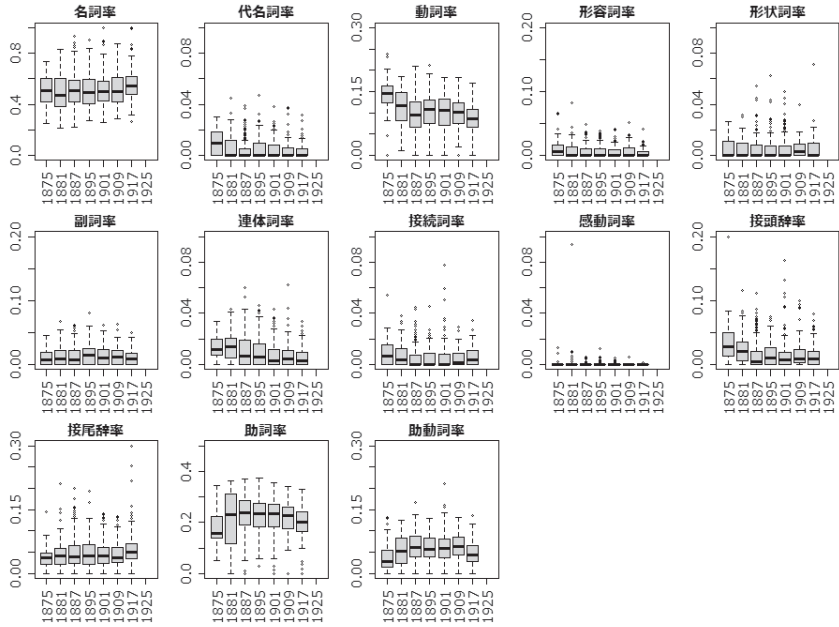


図5 「明治・大正編V新聞」の文語体非文芸サンプルの地の文の品詞率の分布

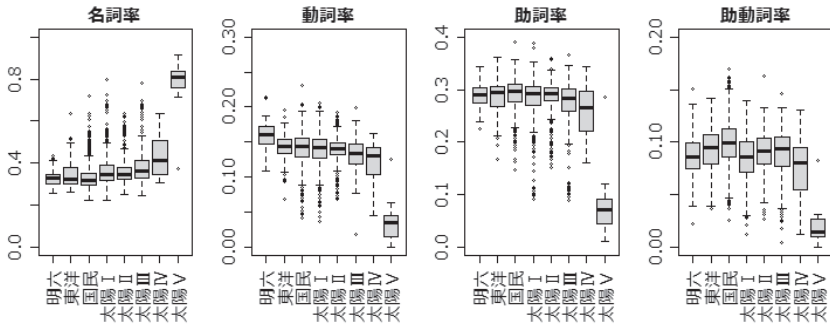


図6 「明治・大正編I雑誌」の文語体非文芸サンプルの地の文の主な品詞率の分布

語を多用し、文末辞として助詞・助動詞ではなく動詞「候う」を使用する候文体の特徴を見ることができる。

図5と図6で名詞率を比較すると、「明治・大正編I雑誌」より「明治・大正編V新聞」のほうが全般に名詞率が高いことが分かる。少ない文字数に多くの意味を盛り

込まなければならない要約的文章では名詞率が高くなる（樺島・寿岳 1965: 16-49）。報道記事とはまさにそのような性質も持つ文章であり、報道記事の多さゆえに「明治・大正編V新聞」の名詞率は高くなっていると考えられる。そして、漢語率は名詞率と正の相関があることから（樺島 1963）、「明治・大正編V新聞」の漢語率が「明治・大正編I雑誌」よりも高いことも報道記事の多さに由来していると考えられる。

4.2 口語体の語種率・品詞率

ここからは口語体の語種率を見ていく。「明治・大正編V新聞」における口語体非文芸サンプルの地の文の、サンプル単位の語種率の分布を示したものが図7である。そして比較のため、「明治・大正編I雑誌」の口語体非文芸サンプルの地の文の語種率の分布を示したものが図8である（近藤 2019b: 図2より作成）。

文語体同様、漢語率に注目して見ていく。図7の「明治・大正編V新聞」の漢語率

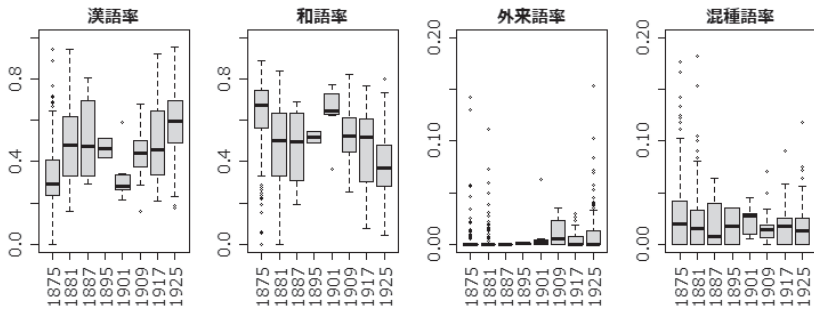


図7 「明治・大正編V新聞」の口語体非文芸サンプルの地の文の語種率の分布

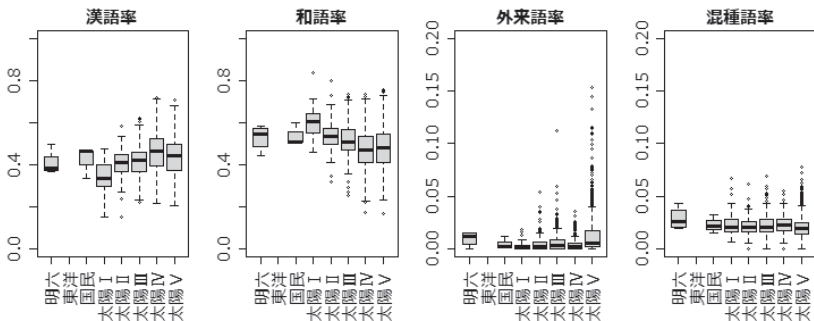


図8 「明治・大正編I雑誌」の口語体非文芸サンプルの地の文の語種率の分布

から明らかな経年変化は見出せない。そもそも 1887・1895・1901・1909 年はサンプルの数が少なく（表 2）、誤差が大きい。その中で、1875 年は他の年とくらべて漢語率が低く 1925 年は高いという傾向は指摘できさうである。図 8 の「明治・大正編 I 雑誌」においては、1875 年・1887 年に対応する「明六」「国民」のサンプルの数が少なく誤差が大きいことから、図 7 と図 8 の間で比較できるのは 1917 年と「太陽 IV」、1925 年と「太陽 V」のみとなる。1925 年と「太陽 V」の比較から「明治・大正編 I 雑誌」より「明治・大正編 V 新聞」のほうが漢語率の高いことは指摘できさうである。

次に、口語体の品詞率を見ていく。「明治・大正編 V 新聞」における口語体非文芸サンプルの地の文の、サンプル単位の品詞率の分布を刊行年ごとに箱ひげ図で示したものが図 9 である。そして比較のため、「明治・大正編 I 雑誌」における口語体非文芸サンプルの地の文の主な品詞率の分布を示したものが図 10 である（近藤 2019b: 図 3 より作成）。

図 9 の名詞率を中心に見ていくと、1875 年の名詞率は低く 1925 年は高いという漢語率との正の相関が見られる。1875 年に名詞率が低いのは、小新聞の読者層にそつ

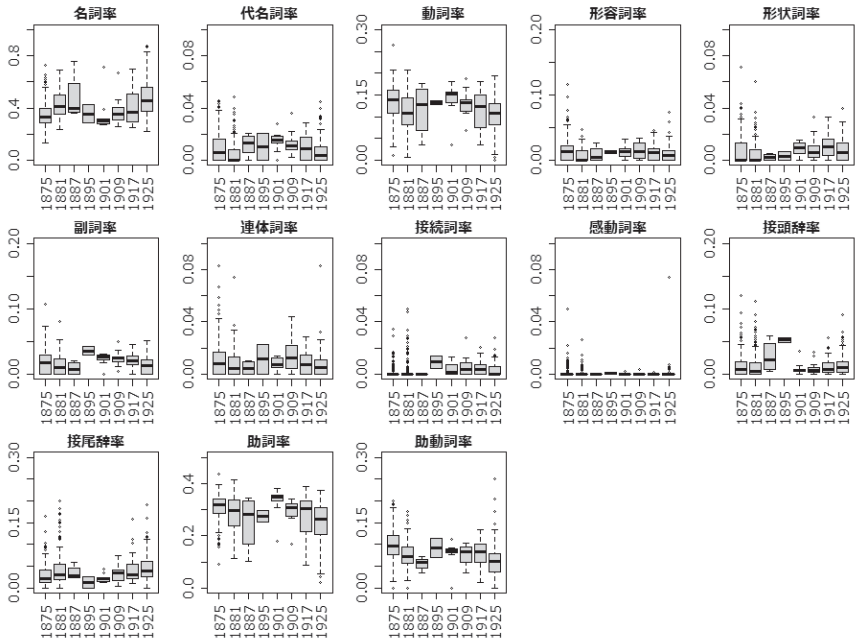


図 9 「明治・大正編 V 新聞」の口語体非文芸サンプルの地の文の品詞率の分布

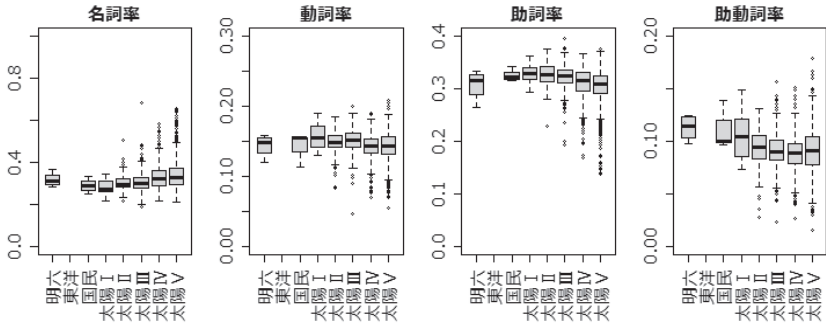


図10 「明治・大正編 I 雑誌」の口語体非文芸サンプルの地の文の主な品詞率の分布

て(1)のような平易であり冗長ともとれる文体を採用しているためと考えられる。図7に見られる1875年の漢語率の低さは、この名詞率の低さに由来している側面もあるが、加えて当時漢語には馴染みの薄い読者層に向けて日常的な和語を多く用いていることも一因と考えられる。(1)の中に「一件」「^{こと}巡査」のような漢語の漢字表記に和語の振り仮名を付す表記が見られるが、このようなところにも和語を多用する文体であることを見てとることができる。

一方、1925年の名詞率が1917年と比較して高いのは、1917年は(11)のような女性読者向けの敬体の口語体が主流であったのに対し、1925年は敬体の口語体もありつつ、常体の口語体のほうが主流となったことが要因となっていると考えられる。

「明治・大正編 I 雑誌」では女性向け雑誌は男性向け雑誌と比較して口語体の記事で名詞率が低く、その要因として女性向け雑誌には随筆文が多く、相対的に報道文が少ないことがあげられる(近藤2019b)。このことは「明治・大正編 V 新聞」の女性読者向けの記事についても同様であると考えられる。

5 おわりに

以上、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 V 新聞』を使って、明治・大正期の『読売新聞』の文体について、読者層や記事内容の変遷と、文語体・口語体および語種率・品詞率との対応関係について分析・考察した。各年の読者層や記事内容にそって文体が変化し、語種率・品詞率の変化もおおむねそれに起因することが明らかになった。ただし、例えば文語体の漢語率が1917年から1925年にかけてなぜ増加したのかなど、詳細に考察できなかった部分もある。今後の課題としたい。

また、「明治・大正編 V 新聞」を資料として研究をおこなう際、特に1881年以前と

1887年以後との間に大きな断絶があり、文体の様相が大きく変わっていることに注意する必要があることも明らかになった⁵。これは「明治・大正編Ⅰ雑誌」とは大きく異なるところであり、両コーパスを同時に研究に使用する場合も心に留めておかなければならない。この文体の断絶が『読売新聞』個別の事象であるのか、小新聞全体さらには新聞全体の文体変化の大きな流れの中に位置づけられるのか、これについても今後分析を重ねて明らかにしていきたい。

参考文献

- 樺島忠夫（1963）「漢語をめぐって」『計量国語学』27, pp.53-98
- 樺島忠夫・寿岳章子（1965）『文体の科学』綜芸舎
- 国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』（短単位データ 1.2）
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi
- 国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅴ新聞』（短単位データ 0.7）
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#shinbun
- 近藤明日子（2019a）「語種率・品詞率からみる近代文語文の通時的変化」『日本語学論集』15, pp.(64)97-(78)83
- 近藤明日子（2019b）「語種率・品詞率から見る明治・大正期の口語体実用文」『近代語研究 第二十一集』武蔵野書院, pp.151-169
- 近藤明日子（2021）『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』勉誠出版
- 高橋雄太（2022）『日本語歴史コーパス明治・大正編Ⅴ新聞』（短単位データ 0.7）概説書
<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/doc/abstract-shinbun-202203.pdf>
- 田中牧郎（2004）「雑誌『太陽』創刊年（一八九五年）における口語文—敬体を中心に」飛田良文（編）『国語論究第11集 言文一致運動』明治書院, pp.78-107
- 山本武利（1981）『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局

謝辞

本稿は JSPS 科研費 21K00552 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」（<https://www.ninjal.ac.jp/research/cr-project/project-4/diachronic-corpus/>）による研究成果である。

（こんどう あすこ 大学院人文社会系研究科 助教）

⁵ その他に、注1・注2でも触れたように、「明治・大正編Ⅴ新聞」はデータに未整備のところが残っており、この点でも利用に注意が必要である。